



## 2016年 生物工学功労賞 受賞

### 受賞にあたって

味の素（株）研究開発企画部 兼 コーポレート戦略部  
上席理事 松井 和彦



この度、第10回生物工学功労賞という名誉ある賞を頂いたことは身に余る光栄と思っております。受賞対象となった産学連携活動の活性化策の検討と企画・運営には、実に多くの産業界やアカデミアの方々に積極的に関わっていただきました。労を厭わず活動を支えていただいた方々にこの場をお借りして心から感謝申し上げます。

私と本学会の繋がりや端緒となったのは、大阪大学工学部醸酵工学科在学時に日本生命中之島研修所で開催された日本醸酵工学会の年次大会でスライド映写係としてアルバイトをさせていただいたことでした。その際に研究室の先輩が研究成果を発表される姿を見て、いつかは自分も思ったことが記憶に残っています。1981年に味の素（株）に入社し、その後本学会の正会員となり、情報収集の目的で何度か年次大会に参加させていただき、また、一度だけですが口頭発表や共著者として学会英文誌に投稿させていただいたこともあります。学会本部や支部の活動には直接的にも間接的にも関わることはなく、年会費だけは支払う、ごく普通の正会員として過ごしておりましたところ、2009年の春に、突然、本学会事務局から、学会理事を引き受けていただきたいとの連絡がありました。どうしたものかと上司に相談したところ、君も少しは学会に貢献するようなこともしなさいとの指導があり、また、任期は2年ということでしたので、お引き受けすることにしました。飯島信司会長の下で産学連携担当の理事を務めましたが、さまざまな方々との出会いがあり、これまでにない経験をさせていただき、原島俊会長、園元謙二会長の下でも産学連携を担当させていただき、気がつけば6年が経過しておりました。今振り返ると、不思議な縁があって、ある日突然、新たに進む道への門戸が開き、その道を縁に従って歩いてきた6年であったように思います。

理事会では、学会の将来構想や活性化策について盛んに議論が交わされる6年間でありますが、産学連携の活性化も課題でした。2010年度は産学連携担当の理事の方々と年次大会における本部企画シンポジウムの企画・運営に取り組み、また、2011年度、2012年度は柳謙三産学連携委員会委員長、坂口正明幹事のリーダーシップの下、産学連携活動の新たな活性化策（生物工学産学技術研究会と生物工学基礎教育セミナーの開催、大学などへの非常勤講師の斡旋など）の検討に関わり、柳

委員長の「継続は力なり」という方針を引き継ぎ、2013年度、2014年度は倉橋修産学連携委員会委員長の下、幹事として上記本部企画シンポジウムや年2回の生物工学産学技術研究会、年1回の生物工学基礎教育セミナーを継続開催し、多数の学生の方々と企業の若手研究者・技術者の方々に参加いただきました。学会本部の産学連携活動のホームページの改訂や大学などへの非常勤講師の斡旋などにも取り組みました。また、国際交流担当としての役割もいただき、横田篤国際担当理事のリーダーシップの下、学会本部主催の国際シンポジウム（SBJシンポジウム）のコンセプト立案に関与し、第1回、第2回のSBJシンポジウム実行委員会委員として企画・運営にも関わらせていただきました。さまざまな取組みを進めるに際して常に頭の中にあつたことは、交流があつてこそ連携は生まれるということと本学会主催の交流の場は、会員の方々にとって、オープンサイエンスやオープンイノベーションのきっかけの場であり、また自らのキャリアの振り返りや新たな道に進むきっかけの場にもなっているのであろうということでした。

日本生物工学会は2022年には創立100周年を迎える伝統ある学会であるといえると思います。1923年に大阪醸造学会として設立され、1962年には日本醸酵工学会に、1992年には日本生物工学会へと学会名称が変更されてきておりますが、先輩諸氏が会員の声に真摯に向き合い、リスクを取って変革にチャレンジされた結果であり、これが今日の発展につながっているものと思います。常に自己革新を続け、次々と新境地を拓いた早世の日本画家、速水御舟氏（1894～1935）は「梯子の頂上に登る勇氣は貴い、更にそこから降りて来て、再び登り返す勇氣を持つ者は更に貴い。大抵は一度登ればそれで安心してしまう。そこで腰を据えてしまう者が多い。一後略一」と述べておられます。頂上から降りるといっても降り出しに戻る訳ではなく、その経験の数だけ他者には見えないものが見えているはずで、一歩でも二歩でも先に行こうということではないかと思ひます。伝統は革新の連続といわれます。本学会がさまざまなステークホルダーの声に耳を傾け、これまでの歩み・経験を糧に、自らを変革することで、新たに進む道を創造し、社会に大きく貢献する存在であり続けることを祈念しております。